



近江大津宮錦織遺跡 — 発掘調査最新情報 —

大津市歴史博物館

館長 松浦 俊和

はじめに

大津市錦織一丁目の住宅街の一角から、大津宮に関わる大型の掘立柱建物跡が初めて発見されたのが昭和49年(1974)。今年(平成16年)で、ちょうど30年になります。この間、滋賀県教育委員会や大津市教育委員会が錦織地区や、その南の皇子が丘地区で継続的に発掘調査を行い、いまでは大津宮の中心部分の建物配置が復原できるまでになってきました。そこには、大阪市の^{うましち}上町台地に造られた前期難波宮(大化改新後に遷都が行われた難波長柄豊碓宮と考えられている)に似た建物配置をもった空間が広がっていたようです。しかし、大津宮にはまだまだ判らないことが数多くあります。そこで、ここ数年の発掘調査で明らかになった新知見を加えた、これまでの発掘調査成果と、これからの課題を見ていくことにしましょう。

大津宮にはどのような建物があったのか

大津宮が詳しく載る史料としては、『日本書紀』があげられます。天智6年(667)3月、近江に都を遷し、壬申の乱があった天武元年(672)7月までの5年半余りの間に、宮の状況がある程度理解できる記述がいくつかあり、それを見ていくと、大津宮には、①「^{おほうち}内裏」、②「^{はまのうてな}濱臺」、③「^{おほくら}大蔵」、④「^{みや}宮門」、⑤「^{みあらか}殿」、⑥「^{ろこく}漏剌」、⑦「^{にしのごあんどの}西小殿」、⑧「^{おほりだのみや}内裏佛殿」、⑨「^{にしのごあんどの}内裏西殿」、⑩「^{おほくら}大蔵省第三倉」、⑪「^{おほひのつかさ}大炊」、⑫「^{おほとの}大殿」といった施設や建物があったようです。(①~⑫のふりがなは日本古典文学大系『日本書紀<下>』-岩波書



内裏正殿復原図(大上直樹氏作図)

店一による)

これを見ると、大津宮には、まず、天皇が政務を執り、日常生活の場となる「^{だいり}内裏」があり、その中に「西殿」「佛殿」といった建物が配置されていたことがわかります。おそらく「殿」・「大殿」も、内裏にあったとは書かれていないが、前後の文章から内裏の中心建物と考えて間違いなく、「西小殿」も「内裏西殿」との関連から、内裏にあった建物と見てよいでしょう。すると、「内裏」には、「殿」や「大殿」と呼ぶ建物を中心に、「西殿」や「西小殿」「佛殿」といった建物が配置されていたことになります。

次に注目したいのが「宮門」です。宮門(南門ともいう)については、『日本書紀』の推古16年(608)8月や同18年10月の外国使節が小墾田宮を訪れた記事、また同12年9月の小墾田宮へ官人が出仕する際の礼法を改めた記事、更には持統朝の飛鳥浄御原宮に見える記事などから、朝堂の南に開く門とする解釈が一般的になっています。先に紹介した大津宮の「宮門」も、これと同じものと考え

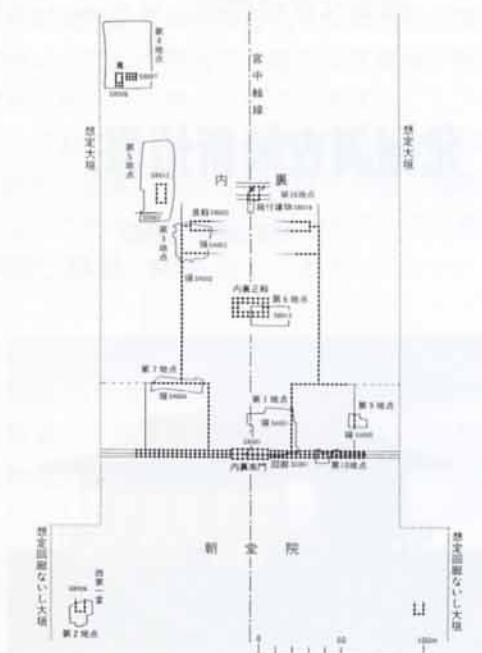


図1 大津宮中枢部推定復原図
(林博通氏作図)

られ、内裏の南に「朝堂」(官人たちが政務を行う朝堂院)が広がっていたこともわかります。大津宮も、宮門を入った北側に朝堂院が広がり、その北に内裏があるという基本的な構成を取っていたようです。

また、「大蔵(省)」「大蔵省第三倉」「大炊」「漏剋」といった役所や各種施設の存在を示す記載があり、「内裏」に隣接してこれらの施設も建っていたのでしょう。

この他にも、わずかだが、大津宮の施設や建物のことを書いた史料があります。例えば、天平勝宝3年(751)に成立した漢詩集の『懐風藻』には「庠序」、藤原鎌足の伝記(『鎌足伝』、また『大織冠伝』ともいう)には「濱樓」「私第」「淡海之第」などが見え、宮の周辺に学校(「庠序」)や藤原鎌足の邸宅(「私第」「淡海之第」)、湖畔には天皇が皇族や群臣たちと宴を催した楼閣などが建っていたこともわかります。これらのことから判断して、大津宮には、天皇が政務を執るのに必要な諸施設は概ね揃っていたと考えてよいでしょう。

これまでに明らかになった建物配置

昭和49年暮れの発見以来、現在までに20カ所近くから、宮に関連する遺構が確認されています。いずれも錦織一・二丁目、皇子が丘一丁目に集中しており、遺構の広がり最大に見積もって東西400m×南北450m程度だろうと考えています。おそらく、この範囲の中に、先に見た「内裏」と「朝堂院」からなる宮の中核部分及び役所などが配置されていたのでしょう。

個々の遺構を見ていくと、まず、昭和49年発見の回廊が付く門とする東西棟建物(推定「内裏南門」で、東西7間×南北2間の規模を想定)、その北約80mに位置する廂付き東西棟建物(推定「内裏正殿」)、さらにその北約70mで見つかった廂付き東西棟建物(「内裏正殿」よりやや規模が小さい。以後、「大型建物Ⅱ」と呼ぶ)の3棟が建物の中軸線を同じくして南北に並ぶことから、周囲の遺構との対比で、宮の中核建物と位置付けています。

また、「内裏南門」を入った東西両側に、一辺37m前後の方形区画が存在することも明らかになっています。同様の区画をもつ前期難波宮では、「八角殿」と呼ぶ八角形の特殊な建物があり、大津宮でも、同区画内に何らかの施設が建っていたと考えているのですが、まだ見つかっていません。さらに、「内裏南門」と「内裏正殿」との間に広がる空間にも、いまのところ建物は見つかっていません。ただ、「内裏正殿」は、周囲を塀などで区画した空間に存在する建物として位置付けられていたようで、すぐ北の「大型建物Ⅱ」とともに、宮の中心建物と考えられている『日本書紀』記載の「殿」や「大殿」との関わりが注目される建物です。

次に、「内裏南門」の南側、すなわち「朝堂院」にあたる空間部分では、のちの藤原宮や平城宮に見られるように、東西に数棟ずつの建物を配置するのが一般的なのですが、大津宮に

このような建物群があったのかは確認できていません。わずかに、南北棟建物跡が1棟(位置から見て朝堂院西第一堂に相当)見つかったに過ぎません。また、この南には「宮門」と呼ばれた朝堂院に入る門の立地が想定されるのですが、その位置もまだ未確定です。

このような発掘調査結果をもとに、建物配置を復原したのが図1です。

最新の発掘調査成果

ここ数年、大津宮に関する新しい遺構の発見はなかったのですが、平成13～15年度にかけて、「大型建物跡Ⅱ」の北東側一帯で3カ所の発掘調査が続けて行われ、大津宮の範囲を考える上での大きな成果がありました。



C地点で見つかった建物跡
(大津市教育委員会提供)

「大型建物Ⅱ」の北側一帯では、これまで倉と見られる建物跡をはじめ、小規模な掘立柱建物跡が数棟見つかったのですが、建物配置を復原するところまでは至っていませんでした。このような中で、3カ所の発掘調査が行われたのです(図2)。

まず、柳川沿いに位置する2カ所については、平成13年度にA地点、同14年度にB地点の発掘調査が行われ、いずれも大津宮の時期の遺構は確認できませんでした(大津宮前後の古墳時代や奈良時代の遺構は見つかった)。さらに、旧地形が東に向かって急に落ち込んでいくことも明らかになっています。一方、すぐ南に位置するC地点では、平成15

年度の発掘調査で、大津宮に関連する東西棟の掘立柱建物跡(東西2間以上×南北2間)や南北方向の堀跡(目隠し堀か)が確認されただけでなく、両地点の間にかかなりの高低差があることも判りました。両者で正反対の結果が得られたのです。しかも、両者の間を流れる東西方向の小さな水路を境にして、北側が小字「鳥居川」、南側が小字「王流^{おうりゅう}」というように小字も明確に異なっています。

このような結果から判断して、大津宮の内裏の北限を、A・B地点とC地点の間に設定しました。これにより、「内裏」の規模は南北約240mとなります。

ただ、問題が少し残っています。それは、今回の調査地点西側のD地点で行った発掘調査で、予想された内裏の北を限る遺構が見つからなかったのです(大津宮に関わる遺構は倉と見られる建物跡が南端部分から見つかっただけ)。ただ、同地点は第二次世界大戦直後に変電所が造られたといわれており、その



図2 平成13～15年度発掘調査地点

工事により遺構面が壊されてしまった可能性が強く、これが原因で北限を示す遺構が検出できなかったと考えられています。

いずれにしても少し問題点は残るものの、C地点の北側に大津宮の内裏の北限（現時点では、これを宮の北限とも考えている）を設定してよいだろうと見えています。

これからの課題—まとめにかえて—

昭和49年暮れの発見以来、30年、この間に数多くの発掘調査が行われ、宮の中核部の建物配置及び内裏北限が明らかになってきました。しかし、まだまだ解明しなければならない問題が山積みしています。その中で最大の問題が、宮の規模の確定です。

そこで、見直してみたいものに「小字名」があります。図3は、大津宮に関わる遺構が見つかった地点と小字の関係を示したもので、この図から、大津宮の遺構が発見された地点が、1ヵ所（E地点）を除いて「大將軍」「王流」「御所大平」「御所ノ内」「南川」に集中していることが判ります。E地点も「南川」に隣接する地点にあり、北側の遺構群と一緒に考えてよいでしょう。すると、大津宮中核部の建物が立地する範囲は、左右対称の建物配置から、「向海道」を含めた6つの小字の区域が想定できそうです。ここで、少し気になるのが、その南に位置する「五反田」と「小路海道」という小字です。

なぜ、気になるかという点、この2つ以外の小字は、県道（これが大津宮中核部の建物配置の中軸線と考えられている）を境にして東と西にきれいに分かれているのですが、ここだけ県道をまたぐ形で細長く存在しています。そして、これを境にして、北側に大津宮中核部の建物が集中し、南側からは宮に関連する建物がまったく見つかりません。さらに、E地点からは、東西に延びる溝跡（幅約1.3m）が見つかり、先にあげた2つの小字のちょうど真西にあたっています。



図3 大津宮遺構検出地点及び小字図

このことから、E地点の東西溝が立地するラインを宮の南限とし、2つの小字のいずれかに朝堂院に入る「宮門」を想定することは可能だろうと思います。

ただ、先の地点に「宮門」を設定すると、「朝堂院」の規模が南北約190mと、かなり狭くなり、特異な形をした宮の構造となります。これからは、「朝堂院」の形態の解明が大津宮の規模及び建物配置を確定する大きな鍵になるでしょう。そして、その解明が進めば、大津宮の全体像がかなり鮮明になると確信しています。

〈参考文献〉

- ①『錦織遺跡発掘調査概要報告書』—大津市埋蔵文化財調査報告書(36)— 大津市教育委員会 2004年
- ②『大津市埋蔵文化財調査年報—平成13年度版—』大津市教育委員会 2002年
- ③『大津市埋蔵文化財調査年報—平成14年度版—』大津市教育委員会 2003年
- ④林博通『大津京跡の研究』 思文閣出版 2001年

滋賀文化財教室シリーズ No.214号

発行年月日 2005年3月6日
 編集・発行 財団法人 滋賀県文化財保護協会
 〒520-2122 大津市瀬田南大萱町1732-2
 TEL(077)548-9780 FAX(077)543-1525